プロジエクト 出雲市大社町の手錢家に残る資 出雲市大社町の手錢家に残る資 料には江戸時代の出雲文化を用 ジェクトはこれらの資料を読み ジェクトはこれらの資料を読み をしたプロジェクトで、2014 としたプロジェクトで、2014 としたプロジェクトで、2014

平成27年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書

出雲文化活用プロジェクトとは

理の資料も含めた膨大な古典籍と文書類が残されている。と聞いている。では、でいるのは、江戸時代中期から明治維新までの間、長く大年寄、を営むとともに、江戸時代中期から明治維新までの間、長く大年寄、時代前期に大社へ移り住み、酒造業の傍ら御用商などさまざまな商売時代前期に大社へ移り住み、酒造業の傍ら御用商などさまざまな商売出雲大社のほど近く、神迎の道に面して居を構える手錢家は、江戸

所蔵資料を利用した企画展をこれまで継続して行ってきた。資料を基に平成五年に開館した私立美術館で、館蔵資料および手錢家公益財団法人手錢記念館は、手錢家から寄贈された約五百点の美術

カイブ上で公開している。り、公開可能な資料については、島根大学附属図書館のデジタルアーり、公開可能な資料については、島根大学附属図書館のデジタルアト十七年から手錢家が所蔵する蔵書に関する調査を継続して行っておまた、島根大学法文学部山陰研究センターと手錢記念館は、平成また、島根大学法文学部山陰研究センターと手錢記念館は、平成

であることが分かってきた。の出雲地方に関する様々な側面を詳しく記録し伝える、貴重な資料群の出雲地方に関する様々な側面を詳しく記録し伝える、貴重な資料群この調査研究によって、これらの資料が江戸中期から後期にかけて

ともに、これまでの蔵書調査によって分かってきた江戸期の出雲地方事業」の助成を受け、「萬日記」と文芸資料のデジタル化を進めると成二十六年度文化庁地域と共働した美術館・歴史博物館創造活動支援手錢記念館が連携して【出雲文化活用プロジェクト】を発足させ、「平手錢記念館が連携して【出雲文化活用プロジェクト】を発足させ、「平手銭記念館が連携して【出雲文化活用プロジェクト】を発足させ、「平手銭記念館が連携して、調査研究と資料の活用をより一層すすめる

蔵書から見る出雲の文芸-」を開催した。の文芸活動を紹介する特別企画展及びシンポジウム「江戸力-手錢家

試みた。 武みた。 はよって明らかになった成果をより親しみやすい形で発信することを が、および小学校へ出向いて行う能のワークショップを開催し、研究 クショップ、当銭嫁に伝来する蒸会記をテキストにした料理再現のワー 二年目である本年は体験型ワークショップとして、書のワーク

島根大学附属図書館 会様大学所属図書館 会益財団法人 手錢記念館 出雲文化活用プロジェクト実行委員会

プロジエクトプロジェクトで、2014年から始まっています。出雲文化を知が多くる手がかりとなるものが多く残っています。出雲文化を用がかりとなるものが多く残っています。出雲文化を用がかりとなるものが多くなっています。出雲文化を用がありとなることを目的としたプロジェクトで、2014年から始まっています。本年は様々なイベントを通してその魅力をお伝えできればと思います。

主催:出雲文化活用プロジェクト (公益財団法人 手軽記念館 / 島根大学財富図書館 / 島根大学法文学部山陰研究センター) 助成:平成27年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業

●記出雲総合芸術文化祭





【講師プロフィール】

葉山桃風/はやま・とうふう

無価機関へはできている。 譲慎書道会 評議員、日本書道家連盟会員。 1981年生まれ。5才より母、鳴風に師事。ロンドン 留学、服飾デザイナーを経て、子ども関連のコン テンツに携わる仕事をしながら、2005年より同年 代を集めた普の会を定期的に開催。2008年、出 動前の朝の時間を使った朝書教室をスタートし、 現在俳句とその変奏をテーマに活動をしているhi →とお寿司屋(酢飯屋)とのイベント「書と俳句の 会」を季節ごとに主催している。また、商品ロゴや パッケージ、店舗サイン等での展開も広げている。

書のワークショップ

「せんすをつくる 一奈良絵本から学ぶ書と扇子作り一

若者を対象にデザインや俳句、食等様々な分野とコラボレーションし、楽しみながら書に触れ、作品作りを行うワークショップを数々手がける葉山桃風を講師に招き、手錢記念館所蔵の作品からインスピレーションを受けたワークショップを開催します。

歌うような散らし書きが特徴の、奈良絵本「くまののほんち」(手銭記念館 所蔵)を手本に、書の基本、ちらし書き、和紙の中の間とりなどを学びま す。参加者は清書として、オリジナルの扇子に作品を仕上げる他、様々な 形で作品をお持ち帰りいただけます。

2015年9月12日(土)

①10:00-12:00 ②14:00-16:00 (二回開催)

- ◆開催場所:手錢記念館(手錢家和室)
- ◆参加費:3,500円(記念館入館料込み)
- *オリジナル扇子代込み/1ヶ月後のお渡しとなります。
- *後日作品送付の場合は、別途送料
- ◆参加申し込み:お名前とお電話番号、参加希望回(午前または午後)をお知らせください。お手本を事前にご用意しますので、 出来るだけ9月5日(土)までにお申し込みをお願いします。
- ◆定員:各回10名



www.tezenmuseum.com

手錢記念館 TEZEN MUSEUM

講演会「ここからの出雲焼」

2015年10月8日(木) 14:00-

- ◆開催場所:手錢記念館(手錢家和室)
- ◆参加費:600円 (記念館入館料込み)
- ◆定員:30名
- ◆講師:出雲焼楽山窯12代 長岡空郷

【譜師プロフィール】

長岡空郷/ながおか・くうきょう

出業焼楽山窯12代。昭和30年、松江市生まれ。早稲田 大学法学部卒業後、京都陶工訓練校成形科に入学。卒 業後は備前で修行し、平成7年帰郷。出雲焼楽山窯11 代・長岡空権の元で作陶に励む。平成11年、田部美術館 大賞『茶の湯の造形展』入選。平成15年、号を空郷とす る。平成25年には、野村美術館(京都)において個展を開 催するなど、全国各地で精力的に個展を行っている。

料理イベント「秋の茶懐石 ―江戸時代の茶会記から―」

昨年行い大変好評だったワークショップを今年も行います。 手錢記念館が所蔵する江戸時代の茶会記をテキストに、 江戸時代の茶懐石を再現して試食します。



2015年11月13日(金)

【調理からの参加】10:00 【試食のみ】12:30(試食開始は13:00)

- ◆開催場所:大計コミュニティヤンター
- ◆参加費:2,000円(記念館入館料込み)
- ◆定員:調理 10名 試食 20名
- ◆料理指導:安藤登(日本料理 登わ)

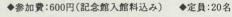


体験ワークショップ

「大社 能を知る集い ―舞歌(ぶが)の身体―狂言と笛の世界観―」

狂言と笛・・・・?と、不思議に思う方も多いと思いますが、能と同じく狂言も、演技の基本は舞と謡。 笛・小鼓・大鼓・太鼓で構成される囃子(はやし)は、実は、狂言にとっても大切なんです。 知ってびっくり!笛と狂言の深い関係を楽しく体験してください。

2015年 11月18日(水) 14:00- ◆開催場所:手銭記念館





【護師プロフィール】

奥津健太郎/おくつ・けんたろう

能楽和泉流狂言方。1972年生まれ。東京都在住。故13世野村 又三郎信廣(重要無形文化財総合指定)に師事。東京藝術大 学卒業。狂言のワークショップや講座、語りなど幅広く活動。ま た、能面・狂言面の制作・修復も行う。「親子でたのしむ狂言の 会」(目黑区後援)主宰。公益社団法人能楽協会正会員。



機字殿/つきたく・さとし

能楽森田流笛方。1961年島根県生まれ。東京都在住。島根 県立松江南高等学校卒業。国立能楽堂研修第二期修了。 故・寺井啓之、中谷明(ともに重要無形文化財総合指定)に 師事。公益社団法人能楽協会正会員。重要無形文化財総合 指定、松汀利、南会主案。

<u>申込み・問い合わせ:TEL·FAX 0853-53-2000</u> E-mail info@tezenmuseum.com

【手錢記念館で開催中の展覧会】=

「支える道具と彩る道具」7月15日(水) - 9月23日(水)

宴、茶席などで用いられる華やかな器。それらを陰で支える水屋道具や日用の器。硯箱や文台、水滴など、日々の生活を楽しくするような 加飾を施された文房具。ハレの場から日常まで、さまざまな場面で用いられた江戸時代から昭和半ばまでの道具や器、約80点を展示します。

「茶陶 - 出雲焼の原点から憧れまで - 」 10月7日(水) - 12月20日(日)

萩から招聘された陶工によって始まり主に茶陶を焼いていた楽山焼と、さまざまな雑器を焼いていた布志名焼。その後、松平不昧公

の指導のもとで洗練され、高麗写し、京焼や安南物の写しなど に優れた作品を残し現代まで続いています。これら出雲焼の 原点から目指したものまで、館蔵資料から考える展示です。

主催:出雲文化活用プロジェクト

公益財団法人 手銭記念館 / 島根大学附属図書館 / 島根大学法文学部山陰研究センター 助成:平成27年度 文化庁 地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業 🈤

和前 牽納山 阿国の墓 神抑の道 。銀行 大土地•手 錢 記 念館

TAT ON RATIO - 9:00-16:30 火曜日(火曜日が祝日の場合は翌日) 休館日 -12月21日—1月5日、展示警期間中 大人600円(500円)、 **高校**生以下400円(300円) ※()内は20名以上の団体料金 〒699-0751島根県出雲市大社町杵築西2450-1 電話/FAX — 0853-53-2000 - info@tezenmuseum.com



www.tezenmuseum.com

書のワークショップ

「せんすをつくる

―奈良絵本から学ぶ書と扇子作り―」

講 師 葉山 桃風

会 場 手錢家和室

開催日 九月十二日 午前十時~十二時・午後二時~四時

参加者 計二十名

ショップ。 仮名と散らし書きの基本を学び、オリジナルの扇子を作るワーク

手錢記念館所蔵の奈良絵本「熊野の本地」(江戸時代前期)の多様

書家・葉山桃風さんに講師をお願いな散らし書きの面白さに着目された

した。

島根県出身の俳人、原石鼎の俳句をテキストに選び、秋の句五句をそれぞれ散らし書きしたお手本をあらから好きな句、好きな散らし方を選から好きな句、好きな散らしお手本をあらんで扇面に書いてもらった。

きのバリエーションの豊かさや自由な散らし書きを実際見て、散らし書まを実際見て、散らし書まず初めに「熊野の本地」の様々



(1) さを感じていただき、その後、基本の運 を感じていただき、その後、基本の運

展面に書く場合は要を中心として放射 、最後は扇面用の台紙に清書し、遊印 し、最後は扇面用の台紙に清書し、遊印 し、最後は扇面用の台紙に清書し、遊印 し、最後は扇面用の台紙に清書し、遊印 し、最後は扇面用の台紙に清書し、遊印

て、後日皆さんへお渡しした。

予想以上にすばらしい出来映えで、参加者からは「集中できて楽しかっ2時間という限られた時間の中だったが、真剣に取り組んだ作品は

感想が寄せられた。た」「書を習いたくなった」といった



講演会「ここからの出雲焼

講師 長岡 空郷 (出雲焼楽山窯十二代)

会 場 手錢家和室

参加者 三十一名

からお話しいただく講演会。に関連して、楽山焼の伝統を継承する立場から、また、陶芸家の立場さんを講師にお迎えし、企画展「茶陶~出雲焼の原点から憧れまで~」楽山窯十二代として、精力的に県内外で個展を行っている長岡空郷



でいただいた。 構造と焼き方、火や熱の回り方が ないくつも並べ、具体的に説明し ないくつも並べ、具体的に説明し をいくつも並べ、具体的に説明し をいくつもが、火や熱の回り方が



また、出雲焼が持っている一色に京都とのほどほどの距離感と、楽山と布志名という二つの窯を存立させた不昧公の存在によって生み出されたこと、それを受け入れる寛容な土地柄が、出雲焼が現代まで伝承される大きな後押しとなっていること、今後、茶陶の美意識や好みがどのように変化していくのか、など、展示資料やご自身の作品を例に挙げながらお話が続いた。

だきながら、ギャラリートークを行った。後半は、展示室に場所を移し、みなさんからの質問にも答えていた

料理再現ワークショップ

「秋の茶懐石-江戸時代の茶会記から-」

講師 安藤登

場 大社コミュニティセンター

会

開催日 十一月十三日

調理 午前十時~ 試食 午後一時~

参加者 調理 十五名 試食 三十名

江戸時代の茶懐石を再現・試食するワークショップ。

藤登さんの指導で調理した。完成した料理は、手錢家に伝来する江化十年十一月九日口切りの茶事で供された茶懐石の献立を選び、安事を記録した「大圓庵様御一代御茶事記」(手錢記念館蔵)から、文松江藩七代藩主松平治郷(号不昧)が江戸・大崎別邸で行った茶

試食した。戸〜明治時代の器に盛りつけて



【献立と食器】

(※は、追加した献立)

向(清水焼染付八角皿)鴨の杦焼

/わさび

飯 〈本朱金沃懸椀〉

汁 **〈本朱金沃懸椀〉** 天王寺蕪

菓子椀〈溜塗唐草鳳凰蒔絵菓子椀、

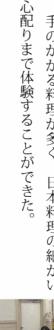


牡蠣しんじょ/柚子輪島塗黒地散らし梅蒔絵菓子椀〉筒牛蒡/

/蓮根寄せ田楽[※] 引物〈**黒内朱七寸重箱**〉 鯛細作(おから和え)

は少し違う手間のかけ方まで、盛り沢山の内容になった。牡蠣しんじょの作り方、鯛の細作りと昆布締出州のひき方、おからの下処理、筒牛蒡や出汁のひき方、おからの下処理、筒牛蒡や

手のかかる料理が多く、日本料理の細かいけ取り回しとした。ので、今回重箱に盛りつが基本となっているので、今回重箱に盛りつけること





御菓子 塩瀬饅頭

酉十一月九日正午御口切 舟越二而

御掛物 東山 無学祖元 めはり柳

画

上下 定家とんす 茶沙 萬代屋

釜

茶入藤重中棗 水さし 木地釣瓶

剣先とんす

茶碗古志野

炭斗 ふくへ

筒石州候

利休

青磁桃

ノンコウ

御廣座

趙昌筆

花扇花鳥 薄茶器

秀次中次

釜

杉角折曲ツハフキヲ敷て

向 鴨の杦焼 わさひ 汁 天王寺蕪

椀

かきしんしやう

ありなん

十天至寺委元中等

吸物 生海苔

香物

なら つけ瓜

鯛細作

からあへ

惣菓子

はないないっぱい 五年かれのかい

吸气适益 表的人

松かねせんへい 紅石竹

> 金由萬人為 智な ノンコウ 水差 泥石屋 中の人 若院 長点野 村田さし ろりノントリ なる気は けるかって 一次 直移他 ちのらるあるりは えるる事事

七

第七回大社 能を知る集い

|舞歌の身体 狂言と笛の世界観

講 聡 (能楽師 森田流笛方)

奥津 健太郎 (能楽師 和泉流狂言方

会 場 手錢家和室

開催日 十一月十八日

参加者 十三名

ちな能楽を、江戸時代のようにもっと身近に、自由に楽しむための入 出雲とも関連するキーワードでテキ り口になれば、という趣旨で行っている能楽のワークショップ。毎回 大社 能を知る集い」は、現代では高尚で難解な芸能と思われが

ストを選んでいる。

ろうことが推測できる。 社で能楽が盛んにおこなわれたであ などが伝来しており、江戸時代の大 主の号が墨書された囃子の手付け本 手錢家には多くの謡本や、五代当

老らの家などで能を演じる連中が あったことが、島根県立図書館所蔵 は能を嗜む町人らの中に、お城や家 「御囃子日記」から分かっている。 また、江戸時代の城下町・松江で



役割についての説明ののち、狂言「花折 もらうことにした。 と囃子(笛)の関係を紹介し、体験して の一節を謡ってみる。 の酒宴の場面でのやりとりと、様々な謡 という狂言を道案内に、狂言と能、狂言 能楽で狂言方、囃子方が果たしている 今回は、「御囃子日記」にある「花折.

笛のフレーズの覚え方を学び、それに合 わせて舞われる狂言の神楽を観る。 次に「唱歌(しょうが)」と呼ばれる、

ウレイカグラ」を皆で謡い終了した。 さんの「ユウレイノウタ」を再構成した「ユ んどん声も大きくなっていった。 はなかなか難しく、皆さんも力が入り、ど 神楽舞を行った。足拍子が入るうえに次第にテンポの速くなるこの舞 最後に、松江出身の詩人である入沢康夫 その後、 参加者も唱歌と足拍子を練習し、唱歌と足拍子を合わせて



小学校での能楽体験ワークショップ

「能と狂言を体験しよう」

師 槻宅 聡 (能楽師 森田流笛方)

らうだけでなく、実際に動き声を出すワークショップ。徴、表現などを学びながら、能楽師の声や所作、音を身体で感じても大社町内の小学校へ出向き、六年生を対象に、能や狂言の歴史、特奥津(健太郎(能楽師)和泉流狂言方)

■大社小学校

開催日 十一月十七日

》加者 五十五名(六年生)

比較し、狂言の笑い方、泣き方、怒り方を実際にやってみた。せて、能面との違いから能と狂言の違いを考えた。喜怒哀楽の表現で能楽、能と狂言の歴史を紹介し、狂言で使う、おかめ、鬼の面を見

神楽舞でおこなわれる「唱歌」、足拍子を練習し、全員で神楽舞を行っ次に、笛の音を聞いて狂言における囃子方の役割を感じてもらい、また、狂言「盆山」を鑑賞し、狂言の様々な表現を体験した。

■遥堪小学校

た。

開催日 十一月十九日

参加者 十八名 (六年生)

「ユウレイカグラ」も練習し、最後に男女に分かれて掛け合いで謡った。大社小学校と同じプログラム。生徒が少なくまとめやすかったため、

■大社小学校











九

日付	10月8日	9月12日
<u></u>	講演会	書のワークショップ
タイトル	ここからの出雲焼	せんすをつくる
参加人数	31	20
回答枚数	20	16
	イベント・ワークショップを知りましたか´	
チラシ	3	1
ウェブサイト	1	i
友人から	4	5
関係者の紹介	9	7
Facebook	0	1
1 deebook	3	i
その他	町内有線放送:2	チラシを置いてもらっていたお店で聞いた
□ ★□のイベント・□□		2
	<u>クショップの内容は理解しやすかったです</u> た。	
よく理解できた	14	14
おおむね理解できた	5	2
どちらともいえない	0	0
一部理解できなかった	0	0
理解できなかった	0	0
その他	0	0
Q3. イベント・ワークショ		
とても良かった	14	15
良かった	6	1
どちらともいえない	0	0
良くなかった	0	0
無回答	0	0
Q4. ご感想をお聞かせくだ	出雲焼が長い時を経ていろいろな文化を取り入れながら継がれていることに興味を持った わかりやすかった 楽山焼の良さがよくわかった	時間が少なくて焦ったが、できあがりが楽 しみ 楽しく学べた 収蔵品と関連づけたワークショップで理解
	楽山陸の頂占が理解できた	が深まった 奈良絵本という古い資料を活用したことが 新鮮
	当代の作陶に対する思いを知ることができ た	習字を習いたくなった
	陶芸についてもっと学びたいと思った ちょうど良い人数で良かった	難しかったが楽しかった 練習時間がもう少しほしかった かなを書くのは楽しかった
Q5. 今後どのような企画が	」 があったら参加してみたいと思いますか。ご	
() 人() () () () () () () () ()	美術と音楽とのコラボ	伝統文化に触れたい
	日本画、書道のワークショップ	和に関する企画を継続してほしい
	古代食の料理教室	時絵、漆塗り、金継ぎについて
	お楽コンサート	水墨画
		現代アートや舞踏など、この地域ではあまり体験できない企画
	漆器に関する話 和文化を知る機会をこれからも作ってほし	
	茶会など	ii wana manan wanis. Ziona ii kanana ii kana
	ホムゆし	l .

11月18日	11月13日 料理ワークショップ
	秋の茶懐石 30
	17
	5
	1
1	6
1.	2
	0
Ŭ Ĭ	3
	4.004
チラシを置いてもらっていたお店で聞いた	手錢記念館で知った:2
クショップの中容は理解しわまれ、たっても	新聞:1
	8
	8
<u> </u>	0
	0
	0
	難しかった:1
	12
	13
	2
	1
	0
· · · · · · · · · · · · · · · · · · ·	1
松江出身ということで入沢康夫に興味があった。こんなところで耳にするとは思わなかったが、現代詩を謡うのもおもしろかった	不昧公に思いを馳せながら食べた
***************************************	おいしかった
は健康にも良さそうなので家でもやってみたい	今回は試食だったが、次は調理にも参加したい
このワークショップを経験して狂言の舞台 を見ると、よくわかると思う	初めて茶懐石を作る経験ができ、勉強になった
声の大きさに圧倒された	茶懐石はおもてなしの心の詰まった、手間 のかかるものだとわかった
狂言と能の違いや魅力、動作などわかりや すかった	定期的に開催してほしい
また参加したい	また、参加したい ★次回も参加したい人・・・9 名
あったら参加してみたいと思いますか。ご	要望、ご提案をお聞かせください
古文書を読む会	若い世代を対象とした勉強会やセミナー
謡	学校と連携して教育の一環として子供たち に日本の文化を体験させるような活動
	料理、書、香 茶道に関する講座
	不昧の茶事
	クショップの内容は理解しやすかったです? 8 2 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 0 1 さい 松江出身ということで入沢康夫に興味があったが、現代詩を謡うのもおもしろかったが、現代詩を謡うのもおもしろかった 機会があれば舞台を見たい 初めての体験でのめり込んだ。声のだしてみたいこのワークショップを経験して狂言の舞台を見ると、よくわかると思う 声の大きさに圧倒された 狂言と能の違いや魅力、動作などわかりやすかった また参加したい

【平成二十七年度 企画展】

山紫水明 ~自然・風景・人~

平成二十七年三月十八日~五月十七日

風景を描いた絵画は古来多い。

まな景色が描かれてきた。
景、文人画のように心の有り様を画中に投影した山水画など、さまざまれる人々の暮らしぶりを切り取った作品、歴史的な景観、理想の風闘する人と自然の厳しいやりとりを描く作品、穏やかな自然の中で営闘がる人と自然の厳しいやりとりを描く作品、穏やかな自然の中で格

研ぎ澄まし、憩わせることでもあった。これらの絵画を鑑賞するということは、自身の心をその中で遊ばせ、

中には、大社に逗留した画人による作品も含まれている。企画展では、所蔵資料から人と自然が描かれた絵画を選んだ。その

企画した。 大社における江戸時代の文化活動の一端を感じていただきたいと考え 見る方達に画の中で心を遊ばせるように鑑賞していただきながら、



町人の武者ぶり〜手錢家の刀剣・刀装具〜

平成二十七年五月二十七日~七月五日

当時購入、蒐集されたものと思われる。されていた。現在所蔵している刀剣類は約四十振りだが、その多くは関係者などの宿となる御用宿を長く勤め、当主は代々、名字帯刀を許関戸時代の手錢家は、杵築六ヶ村をまとめる町年寄と、藩主や藩の

た。

趣向を凝らしに凝らしたようなものは見あたらない。

地向を凝らしに凝らしたようなものは見あたらない。

はとんどの作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田とんどの作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田とんどの作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田とんどの作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田とんどの作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の作品は鎌倉後期から江戸中期頃までの、相州、美濃、京田の一次の一次の作品は乗ります。

が、購入する際に何よりも大事な条件だったのではないだろうか。うとともに、町人としての立場を踏み越えないような作品であることわせて考えると、町年寄という公の立場や御用宿としての格式に見合折りに所蔵の刀を披露して鑑定してもらった、などという逸話とも合所蔵文書に残る刀工番付や刀剣に関する写本、藩の家老が宿泊した

元年、七代藩主の弟・駒治郎が宿泊した折りの室礼として記載されを反映して購入したと思われる鐙と鞍、刀剣番付、「萬日記」に寛政今回は、時代に沿って展示した刀剣・刀装具とともに、幕末の世相

りも感じていただければと考え町家が果たしていた役割や心配ども展示し、江戸時代、富裕なている「武者絵屛風」と推察さ





支える道具と彩る道具

平成二十七年七月十五日~九月二十三日

日々の生活に少しだけ色を添える装飾。台など、書斎を飾る道具。それらを陰で支える、水屋道具や日用の器。宴の場、茶席などで用いられる、華やかな陶磁器や漆器。硯箱や文

手錢家伝来の諸道具の中からハレの場から日常まで、江戸時代から、大鉢や燭台、小刀の柄にまで施される様々なデザインと装飾。しさ。茶箱や旅箪笥、茶杓や釜鐶から水屋道具まで、統一された美意や切溜など、コンパクトに収納できる工夫が生み出した整然とした美の外に絵替わり蒔絵が施されきっちりと入れ子になった五つの重箱

昭和のさまざまな場面で用いられた道具や器など約八十点を展示し、

日本人が日々の生活の中につけ加えた工夫と楽しみ方を再発見するこ

とを目的とした。







興味と考察が進むことを期待した。

きた。これらの作品も展示することで、

出雲焼についてより広く深い

出雲焼とも高麗ものとも判別しきれない作品群があることがわかって

茶陶〜出雲焼の原点から憧れまで〜

平成二十七年十月七日~十二月二十日

ものまでを、館蔵資料から見る。中心に現在も人気が高い。これら出雲焼の原点から出雲焼が目指した楽山焼と布志名焼は、併せて「出雲焼」と称され、茶の湯の世界を

また、数年に亘って続けている調査研究によって、所蔵資料の中に、ら近代までの楽山焼、布志名焼を展示して出雲焼の流れを辿ると共に、楽山焼のルーツである萩焼、多くの写しが作られている高麗、京焼、楽山焼の企画展では、不味と出雲焼を結ぶ茶陶という視点で、初期か





<u>一</u> 五

出雲焼について

はじめに

いて、考えてみたい。
そこで、館蔵資料を基に、不昧公と茶陶という視点から出雲焼につ

古楽山

りと言われる、藩の御用窯である。行して萩から出雲入りし、延宝七年(一六七九)に開窯したのが始ま五年(一六七七)倉崎権兵衛(?~一六九四)が弟子加田半六らを同来山焼は、松江藩二代藩主綱隆が毛利公に願ったのを受けて、延宝

「御山」、「御立山」などとも呼ばれていた。楽山は二代藩主の別荘が建てられていた松江市東部の丘陵の名で、

この地に開窯したのか、別の地に築窯していたが後に移ってきたのか、空郷氏によって現在もこの地で続いているが、倉崎権兵衛が当初から楽山焼は、倉崎権兵衛から数えて十一代となる長岡空権氏、十二代

つである。

雲焼」などと呼ばれていた。
雲焼」などと呼ばれるようになるのは不昧公時焼」と呼ばれるようになるのは不昧公時焼」と呼ばれるようになるのは不昧公時焼」と呼ばれるようになるのは不昧公時焼」と呼ばれるようになるのは不昧公時

ている。
お代倉崎権兵衛の開窯から、楽山焼を不いる。

る作品は少ない。 でも当人の作であるとはっきり断定できかれたもので、権兵衛作といわれるものでも当人の作であるとはっきり断定できます。 こかし、古楽山といわれる作品につい

する一対の耳付花入には、楽山熊野神社(松江市市成町)に伝来

て問題ないであろう、数少ない作品の一土で象嵌されており、権兵衛作と断定しの文字が渦巻き文、草花文などと共に白崎権兵衛重由

【図3】古萩茶碗



【図2】高麗写茶碗 (倉崎権兵衛 長岡空味極め)



【図1】彫三島茶碗 (倉崎権兵衛 桑原羊次郎極め)

土同釉の正体」であるとして、倉崎権兵衛作とした作品である。述の耳付花入と比較し、「楽山熊野神社御宝物権兵衛在名の花瓶と同彫三島茶碗(図1)は、桑原羊次郎氏(一八六八~一九五六)が前

思議ではない。
じるものがあるが、権兵衛が萩焼の陶工であったことを踏まえれば不作品である。質感、寸法、佇まいなど、館蔵の古萩茶碗(図3)と通高麗写茶碗(図2)は、楽山焼九代長岡空味が倉崎権兵衛作とした

言われる。のは、権兵衛が出雲の土に合った作行きを試行錯誤した結果であるとのは、権兵衛が出雲の土に合った作行きを試行錯誤した結果であると、楽山焼で、伊羅保など高麗写しの作品が多く作られるようになった

うか。(図4) うか。だからこそ古楽山には、高麗写しの優品が多いのではないだろ本物の高麗作品群に親しく接する経験を持っていたからではないだろ本物の高麗作品群に親しく接する経験を持っていたからだけでなく、約束に似合った、高い技倆と意識の持ち主であったからだけでなく、

系譜は途絶える。 以後四代目まで半六が続くが、四代半六が罷免され、権兵衛~半六の 権兵衛の後は、弟子の加田半六(?~一七〇九)が二代を継ぎ(図5)、

とも判断し難い。 半六作といわれる作品を見る限り、それほどの凡工であったのか、何こしたためと言われているが、古楽山として伝世する作品の多さと、これは三代、四代と続いて凡工であったことと、四代が不祥事をお

が、断絶した理由についてはそれ以外にも、茶の湯を巡る当時の社会うし、技倆が劣っていたこと、不祥事があったことは確かなのだろう初代、二代に較べると、良い作品に接する経験は少なかったであろ

七

はないだろうか。 状況など、さまざまな要因があったので状況や、茶の湯どころではない藩の経済

五代となって、再興される。

・大麗免の後、藩窯としての楽山焼た、土屋善四郎芳方が焼き物御用を勤めた、一七五六~八〇)。その後しばらく空た(一七五六~八〇)。その後しばらく空に、土屋善四郎芳方が焼き物御用を勤め

長岡住右衛門貞政も土屋善四郎芳方も、長岡住右衛門貞政も土屋善四郎芳方の祖先は、初代藩主松平直政と四郎芳方の祖先は、初代藩主松平直政と四郎芳方の祖先は、初代藩主松平直政と四郎芳方の祖先は、初代藩主松平直政と ところ子を施いていたと言われる。)

ととや写茶碗(「出雲ととや 銘さゞ浪」ととや写茶碗(「出雲ととや 銘さゞ浪」で作陶に携わっていた時代の作とみて山で作陶に携わっていた時代の作とみて山で作陶に携わっていた時代の作とみてよいだろう。



【図5】高麗写茶碗 (二代・加田半六 岡田雪台箱書)



【図4】伊羅保片身替茶碗(古楽山)

【図6】ととや写茶碗 銘『さゞ浪』 (出雲焼 酒井忠以箱書)

布志名焼

業地帯だった。 を中心に多くの窯が集まって瓦や日用雑器などを焼いていた民間の窯 宍道湖のほとり、 玉造温泉と松江の間に位置する布志名は、 船木家

為ではないか、というのが現在の通説になっている。 昧公の命でこの地へ移り住んだのは、布志名の窯業レベルの底上げの 安永九年 (一七八〇)、 藩の御用を務めていた土屋善四郎芳方が不

代名詞である黄釉や金流しなどさまざまな技法が民間の窯にも広まっ ていったことも、確かである。 以降、布志名における窯業全体のレベルが上がったことも、 それを裏付ける具体的な文書などはないが、芳方が布志名へ移って 布志名の

と永原家の二家が、 文化十二年(一八一五)に不昧公に召し出され、布志名では、 三代善六、四代善六と、不昧公の下で、仁清や乾山といった京焼の写 しや交趾や楽風の作品など、多様な作品を作り続けていった。 また、享和二年(一八〇一)に布志名で開窯した永原與蔵順睦も 土屋家は芳方以降、息子である二代善四郎政芳 (雲善/出呉善)、 土屋家

藩の御用を務めるようになる。

不昧公の出雲焼

伊羅保、 も加わった布志名焼では、安南、 不昧公の時代、 三島、 御本といった高麗ものの写し、 長岡住右衛門貞政によって再興された楽山焼では 交趾、 京焼、 土屋家に続いて永原家 瀬戸などの写しを中心

> された。 優れた作品が数多く生み出

い は、 ところが大であるのは間違いな た特徴と方向性が生まれたの このように各々はっきりとし 不昧公の見識と指導による

ら質感までよく写している。 公が所持した天竜寺青磁の花入 善六はこの天竜寺青磁の肌色か で中興名物に置かれているが したもので、本歌は「雲州蔵帳 「夕端山」(根津美術館蔵)を写 仁清鷲ノ山写長茶入(永原與 青磁中蕪形花入(二代土屋雲 銘「天晴」(有澤宗滴)) 玉映箱) (図7) は、 不昧

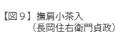
の通り、 い出来映えである。 の景色が見所の個性的な茶入だ 極めて薄く仕上げられた華奢で 8)の本歌は、表千家に伝わる 丈高な姿と二重に掛けられた釉 京焼の名工・野々村仁清の作で、 有沢宗適による銘『天晴 與蔵の写しは素晴らし



【図8】仁清鷲ノ山写長茶入 (永原與造 有澤宗滴箱書)



【図7】夕端山写青磁中蕪形花入 (二代善六 玉映箱書)



昧公という稀代の数寄大名があっ た作品は少なくないだろう。 ることが不可欠であるが、 このように優れた写し物を作るためには、 介の陶工が簡単に見られる筈はなく、 たからこそ実見出来、 オリジナルにじかに接す 写しが許され 不

のではないかと思われる作品もある。 方、写しから一歩踏み出し、 不昧公の美意識を具体的に形にした

造りで軽い茶入で、どこまでも繊細な作りである。 撫肩小茶入(長岡住右衛門貞政)(図9) は、 唐物茶入のように薄

る とした作りと肌合いで、侘びていながらもどこか微笑ましい香合であ 交趾写柿香合(二代土屋雲善か?)(図10) 瓢形草書の「雲善」印が押されている。 この香合には、 二代雲善が不昧公から拝領した印の一つとみられ は、 素朴でざっくり

強い願いがあったのではないか、 茶の湯の理念や理想を具現化する新たな茶陶を生み出したい、 土質を活かして作陶させるという現実的な理由だけではなく、 などと考えたくなる。 の良さを残しながら、自身の好みの大きさや形を求めたのではないか これらの作品を見ると、不昧公の心の中に、 たとえば前述の茶入では、 それぞれの技倆や扱う 唐物茶入 自らの

を与えながら、彼らを育て、 不昧公は、最上の作品に接する機会と、 磨いていったのだ。 厳しく細やかな指導と薫陶

際に出掛けたのは文政四年(一八二一)のことで、不昧公の没後であ 善六の弟)は、不昧公の命で色絵の習得の為、長崎や佐賀へ遊学した(実 土屋家から長岡家へと養子に入り、 楽山焼六代を継いだ空斎

色絵唐子文茶碗 (長岡空斎) 図 1 1 に描かれた九人の唐子達に

一九

が長崎で色絵を学んだという履歴にあっ 入ってきた粉彩独特のものであり、 料が施されているが、 はピンク色やぺったりとした白 これらは中国から 色の 空斎 顔

れるようになる。 布志名双方で、多くの色絵の作品が作ら 的にもより緊密になり、 空斎によって楽山焼、 (図 1 2 空斎以降、 布志名焼は技法 楽山、

りして、 たようである。 寄ったり、 の江戸行きに随行する途中、 はそのような記録がなく、 指導を仰ぐ様になるが、 全国各地の窯が京焼の陶工達を招聘して 十八世紀後半から十九世紀にかけて、 必要な技術や技法を習得してい 空斎のように九州 出雲焼に関して むしろ、 京都に立ち へ遊学した 藩主

取り入れることも可能となる。 て必要な技法、 出向いて学ぶのならば、 の色に染まっていくだろうが、こちらが 教えに来られれば、 役立つ技術やコツだけを 全てがその指導者 自分たちにとっ

きかった筈だ。 その時にも、 ・昧公の、 茶の湯に対する確固たる 不昧公という後ろ盾は大



【図11】色絵唐子文茶碗 (長岡空斎)



【図10】交趾写柿香合 (土屋雲善)

【図12】仁清写色絵紫垣梅竹図茶碗

(三代善六)

というブランドイメージが、作り上げられたのではないだろうか。に染まらない多様なヴァリエーションを持っているのが「出雲焼」だ公の茶陶」というふんわりとした認識で包み込まれ、その結果、一色公の茶陶」というふんわりとした認識で包み込まれ、その結果、一色公工夫を重ね、各々の技法や表現を磨いていくが、対外的には「不味値観と貪欲な意思によって、全く異なった二つの窯はさまざまな挑戦

不昧公以後の出雲焼

善窯)のみとなっている。 善窯)のみとなっている。 一時大いに繁栄した。しかし大正期には衰 たい方向へ舵を切り、一時大いに繁栄した。しかし大正期には衰 やらない方向へ舵を切り、一時大いに繁栄した。しかし大正期には衰 からない方向へ舵を切り、一時大いに繁栄した。しかし大正期には衰 からない方向へ舵を切り、一時大いに繁栄した。しかし大正期には衰 が、明治維新以降は輸出陶器など茶陶だけにこだ などが茶 でいく。

は辛い模索の時期を過ごすこととなった。 楽山焼は、空斎、空入と続くが、藩の庇護のなくなった明治時代に

高麗写しを芯に置いた茶陶を主として作陶を続けている。長岡空味はそれを契機に茶陶へと回帰した。その後は当代に至るまで、点の写しが記念品として頒布されることになり、作陶を担当した九代しかし、大正六年に催された不昧公百年忌の折りに公遺愛の茶陶六

終わりに

出雲焼の流れを辿ると、不昧公の存在の大きさに改めて気づかされ

る。

れたといってよいだろう。たが、少なくとも、出雲地方の文化の多くは、不昧公によって整えらたが、少なくとも、出雲地方の文化の多くは、不昧公の功罪については、これまでも様々に検証され述べられてき

化の礎を築いたと言っても過言ではないのだ。に、たった一人の指導者の美意識が、その後二百年あまり続く地域文布志名焼も長岡住右衛門貞政以降の楽山焼も不昧公が育てたよう

かれ今も不明な点は、多い。 一方で、再興以前の古楽山焼については前述の通り、曖昧なままお

来してきたものの中に、気になる茶碗が十点あまり出てきた。館蔵陶磁器資料の調査をここ数年続けているが、高麗茶碗として伝

い印象を受けるのである。特に土や作行きにおいて、むしろ所蔵する権兵衛や半六の諸作品に近のだが、細部を見ていくと明らかに朝鮮半島で作られたものとは違い、これらの茶碗の多くは、全体的な姿や雰囲気は実に高麗茶碗らしい

公益財団法人手錢記念館 学芸員 佐々木杏里

[参考文献]

『如泥と権兵衛』 太田直行 一九五四年

『島根の陶窯』 伊藤菊之輔 一九六七年

『高麗茶碗名品展』 田部美術館 一九九三年

『古楽山茶碗と水指』 田部美術館 一九九四年

『松平不昧の数寄-「雲州蔵帳」の名茶器-』 畠山記念館 二〇〇一年

『京焼』 京都国立博物館 二〇〇六年

『出雲焼』 出雲文化伝承館 二〇一四年

『伝世品に見られる布志名焼の刻印と銘款』 阿部賢治 二〇一四年

付記

郷各氏より多くのご指導、ご助言をいただきました。ここに記して御礼申し上 企画展開催及び本稿執筆にあたり、西田宏子、鈴木裕子、阿部賢治、長岡空

げます。

〜手錢家萬日記から見る江戸時代〜出雲今昔「婚礼」

平成二十八年一月六日~三月二十七日

する記述も見られる。 手錢家代々の当主が書き継いだ「萬日記」の中には各代の婚礼に関

次第、献立、用いられた食器などについて展示する。 大の中に書かれている床飾りや当時飾られた掛物、婚姻式の式に関して「萬日記」とその他手錢家に残っている様々な記録を抜きれた関して「萬日記」とその他手錢家に残っている様々な記録を抜きれた関して「萬日記」とその他手錢家に残っている様々な記録を抜きが第、献立、用いられた食器などについて展示する。

き継がれるものが見えてきて、さまざまな面白さがある。各代の記述を比較すると、時代によって変化するもの、変わらず引

も興味深い。また、献立を比較すると、食材や調理、献立の変化が見えてくるの

いかと考えた。 より一層、江戸時代の大社の生活や文化を感じてもらえるのではな婚礼は昔も今も変わらない一大イベントである。



「萬日記」と手錢家の婚礼

はじめに

を知ることのできる、大変興味深い資料である。
ぬ思いが垣間見えるとともに、今は廃れてしまった様々な儀式や様式「萬日記」、「婚礼一途」は、婚礼という特別な行事への今と変わら

者とのやりとりや方々からの祝いの手紙、いただいた御祝いの品や返畑かい注意や覚え書き、トラブルまで記された萬留だけでなく、関係、大代白三郎(安秀)についての記載が確認できる。 一端」として書付けをまとめた包みが残っており、八代については、「婚礼一途」一帖が残っている。包みには、縁組みの経緯、式次第、室礼小途」一帖が残っている。包みには、縁組みの経緯、式次第、室礼小途」一帖が残っている。包みには、縁組みの経緯、式次第、室礼が出一途」一帖が残っている。包みには、縁組みの経緯、式次第、室礼が出一途」として書付けをまとめた包みが残っており、八代については、「婚礼に関しては、四代此三郎、六代白三郎(忠助)、七代白三郎(清太郎)、「萬日記」は手錢家当主が代々書き継いだ公私に亘る書き留めだが、「萬日記」は手錢家当主が代々書き継いだ公私に亘る書き留めだが、

婚礼の様子

礼の目録など、婚礼に関わる記録が一括して入っている。

いたようである。に武士の饗応の作法として確立した本膳の決まりに従って進められてに武士の饗応の作法として確立した本膳の決まりに従って進められて婚礼は、平安時代から行われていた宴会の儀式から発展し室町時代

本膳は、式三献 雑煮 本膳 二の膳 三の膳 硯蓋という順番で

屠蘇とお雑煮の元となっているとも言われる。
在の三三九度となった。また、式三献、雑煮と続く儀式はお正月のお不を一杯ずつ繰り返す酒宴の礼法で、この式三献が略式化されて、現三献は、一献・二献・三献と膳を三度変え、そのたびに大・中・小の正献が残っている程度で、明治時代以降すっかり廃れた。このうち式面影が残っている程度で、明治時代以降すっかり廃れた。このうち式

と幸いを願ったのではないかと想像される。ぞれ当主がその時最も「ありがたい」と思ったものを飾り、家の繁栄一方、床の掛物や置物は時代によってまったく異なっており、それ

ようになっていく。このことは、「萬日記」の記述からも確認できる。るための引き替え膳が工夫されたり、後半に素麺やうどんが出されるず持ち帰るものだったようで、江戸時代に入ると次第に、実際に食べ本来、このような料理のほとんどは見るもの、或いはその場で食べ

らではないかと思われる。献立の中で何度も吸物があるのも、その場で食べられる料理だったか

と、客の格式や身分によって日を分けていたと分かる。の品数や献立の内容が異なっていることと客の名簿を考え合わせるこのような婚礼の宴は数日に亘って続いているが、日によって料理

が見えるのも興味深い。 歴代の献立からは、使われた素材や調理の仕方など時代による変化

婚礼に関するそのほかの資料

た文芸関係資料も残っている。る資料以外に、歴代の婚礼に際して贈られた祝儀の和歌や発句といっる資料以外に、歴代の婚礼に際して贈られた祝儀の和歌や発句といっ手錢家には、「萬日記」「婚礼一途」のように直接婚礼の様子を物語

この対幅は、千家国造家や上官と手錢家がいかに親密で、信頼関係がきな役割を果たしていたことを物語る、具体的な証しとなっている。また、八代安秀の婚礼に際しては、千家国造家による和歌の寄書と地で文芸活動が日常的に楽しまれ、暮らしを彩るアイテムとしても大連で文芸活動が日常的に楽しまれ、暮らしを彩るアイテムとしても大きな役割を果たしていたことを物語る、具体的な証しとなっている。

深かったかを示していると考えてよいだろう。

おわりに

「萬日記」の内容は多岐にわたっている。

形を見つけることもできそうだ。出来るだろうし、今はすっかり失われてしまった様々な慣習の本来のくことで江戸時代後期の社会生活や文化の変遷をすくい上げることが宴の記述を中心に抜き出したが、この一点に絞っても、詳細に見てい今回は約百年の間に行われた五回の婚礼について、その中でも式と

翻刻ができなかったこともあって今回の企画展では触れられなかったのつまった資料でもあるのだ。

公益財団法人手錢記念館 学芸員 佐々木杏里

洛

4 中日

多

北多

大方人的 田道 学又的

な存れれん

本床柱前

鶴亀島台

並肴三方

錺如左

花谷鸡龙 千奇言

はかん

宝曆八年 (一七五八) 四代婚礼

〈萬日記二番 百十五〉



百拾五 本座鋪

高砂尉姥

婚姻式

多いないと

土居

土器

梅干

式三献相済

娵御御部屋二御入

床掛盤瓶子神酒

島台 娵御 入駕之時出速 清十夫婦 盃 肴 三方 三方 提子 部屋二御入



落高级 的事信

本座鋪

床前 掛物

高砂尉姥 大黒尊夫

島台 錺 瓶子神酒 色直し

初献

土居 土器

敷いも

吸物 ひれ

田作 上置 雑煮

夜黄なり

土居

土器

巻するめ

千秋万歳

土居

土器

土居

土器

数子 香物

二献

不多 石泉 老多的 るのれ なるをいれん いかんな 5日在見ち~ いいいからう の北京

高砂掛物 床前鶴亀島台 御部屋床

此時 休息有之 嫁御 御部屋二御入

大学中心

後なる

土居

土器

田作

するめ

上置

昆布

二献

土器 土器 三献 香物 数子 雑煮 吸物 敷いも うちみ 箸

元本 松与

君

土居

土居

三五



部屋二而引続

白三郎夫婦盃

御湯出ル

吸物 酒三献

本座鋪一家中■■

千秋万歳

酒 三献 三献

引 ■ の し

焼物たい

本多次 けられたれ 香物 いろく

・ うす板 ひそ の れんこん 木坪 里いも 引いく物かり

かまほこ

平皿

昆布

汁 細大こん つみいれ

う■ほし

部屋にて

上置 雑煮 敷いも

土器



折重箱箸 其外看色々 猶色々

焼物たい 吸酒引酒物 肴

ちち でき をなるの かりつ おあらい 十分多之

めし

木坪 たこ 鱠さっかし うほ

> 汁 しいたけ

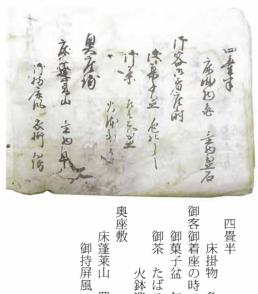
土居 土器 土居 土器 千秋万歳 数子 巻するめ 吸物 ひれ

めし

寛政元年(一七八九) 五代婚礼 〈寛政元年 御婚礼心得筆記〉







御菜子盆 包のし

四畳半

床掛物 亀

置物盆石

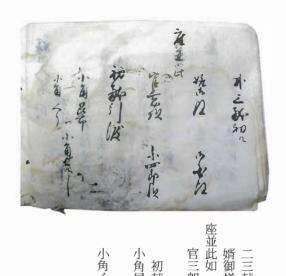
床蓬莱山 置物卓 御持屏風 衣桁 錺

落水は金 最上方

鶴亀島台 盃三方

向本座敷 十月二十二日 床 掛物 寿老人 三幅対 棚 床前 中上 琴 栄花物語 置物卓

<u>二</u>七



小角昆布 初献引渡

小角くり

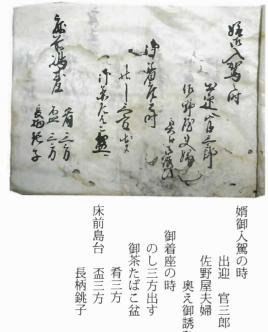
婿御様

御国様

一三献初え

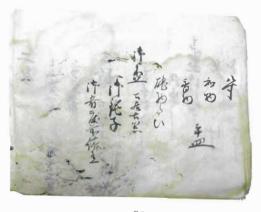
官三郎様

小四郎様



御着座の時 御茶たばこ盆 のし三方出す 佐野屋夫婦 肴三方 奥え御誘ひ

床前島台 盃三方 長柄銚子



御盃 土居土器 御銚子 香物 和 八物 寸 御肴床前膳有 焼物たい 平皿



高盛御膳 三献 色直し 二三献済 め 汁 土居土器

うちみ

二献 土居土器 田作

雑煮敷いも



引肴 御吸物 御酒



台 むき ■ 御酒出す 引て二 里いも くり きんなん 氷こんにゃく

めし

うほ

夕御膳

汁

牛蒡 山いも 板かまほこ たこ 香たけ やきのり

かまほこ 盛こほし

大しいたけ

吸物 京菜

当る路としてかるようしまの物なり としていなかといいかいとなりいらととはの 一年 与第八天八十月的 有

431と中小なるないのであれて人をひろきり上れいる中小なるないのであるであるとはあるからした 一方の石伯一つまくいくて大意 ふきなしきはいりまで吹きしたこうながらいあるとうないとうないましたみないましてみないましてみないましているできましてもいましていましているというというというというというというというというというというという 本山日かるときとしてはいいるのが伝来る からうからし正何はなんはあってする これとしかはまないゆいける日記とのでないないというないないないないないないないないないにはつてこれははんとうないないましません 日と述いるあみとはなりそ 學礼金 全年

〈萬日記六番 百四十一〉

二九

文化五年(一八〇八)六代婿入

〈萬日記七番 百四十七〉

一色多数 一方面好人 网络可以 あるれると ろなからいん ないないかん

(略)

寿はま台 三宝に■のし 歯かため

式三献

蝶■形

対

三つ組

The state of the s 经 奶的 力生 土居梅干 小角栗 土居数子

土居田作

土居香物

雑煮

三献

吸物

ひれ

添身

小角昆布

小角

歯かため

初献

ふた付 茶碗 さゝえ 色直し 高盛御膳 丸ねき

さかな

汁

岩たけ根

焼 二物 膳 きのこ 里いも 焼豆腐

くづ引

平皿

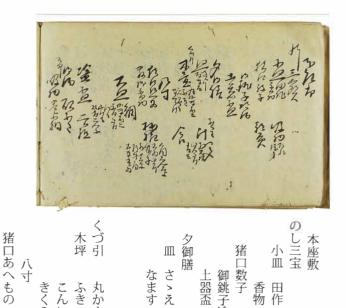
丸かまほこ

御銚子 御盃

蛤

吸物

==



小皿 田作

添 身 れ

猪口数子

土器盃 御銚子冷酒

すまし 御酒

吸物 畳小鯛

塗盃 二つ組

硯ふた 山いかも 松前こんふ

大皿 鯛

香たけ

かまほこ

新牛房 竹子 水菜 むきさゝえ

敷紙

梅椀 香たけ 角しんしょ

皿さゝえ なます

ふき 丸かまほこ

食

きくらけ こんにゃく

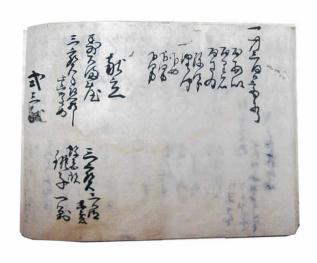
かるなるないとうなる 吸加多了

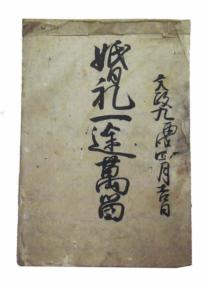
千秋万歳 (以下略) (略)

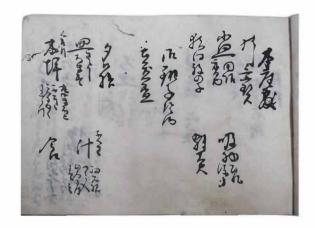
たんさくうと

みそ 鍋引 吸物 小半へん 鉢 鯛差身 吸物 はまくり 丼鉢 煮込はも 台のもの

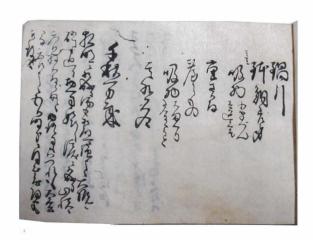
Ξ

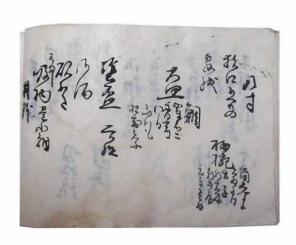












ちかりなないるなん

友声花鳥屏風

石秋之書屛風

れるとなったん

与居民心花彩

四畳半

菱川ノ小屛風

でいるなる

上ノ間

松花堂 横もの

屏風 永徳鶴

あいいかないる

次ノ間

古座敷

床 鶴亀寄合書 二ふく

安永山石 芙蓉盆

安政四年(一八五七) 八代婚礼

〈萬日記十番 四〉

世をすむしるないな 麻松之人对 至多山水山山 智をはそのは

> 九畳 抱一公松竹梅

不二山之石 金峨山水 二幅 風爐釜 床餝

卓、牛香爐(香合三ツ羽床)探幽二ふく対

亀花活二寒梅活る也

新座敷

大月分と 人気がつ中では

引替

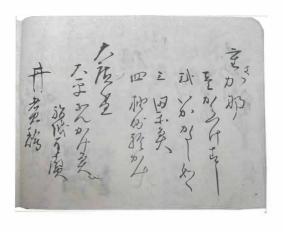
焼のり

落着 小皿 田作 向詰 雑煮 十一月献立 上ふり

かん瓢 糸かまほこ せり 千牛蒡 吸物 ひれ

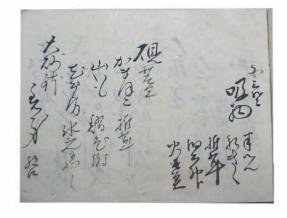
 \equiv

〈安政四年丁巳十月 婚礼一途〉



一、かふつけすし二、いか からし和へ三、田楽魚四、柚砂糖かけ水大広盆大平 あんかけ魚村 賃會

重さかな



かまほこ推山いも鮪花牛蒡水)大砂鉢

氷 鮪 椎 横茸 火取魚 組工神 株茸 ら い い の や そ

新きく

が分子を

対金皮の対金皮の対三塩漬すまし砂物 切身魚大砂鉢 すしいろく

五斗引日 代々酢五斗引ふきのとふかふきのとふ台の物なきのとふ松竹梅 大みかんなり

三宝 千就のし 寿はま台

三宝 三ツ組

歯かため

献立

御増菜

なら漬

二献

小角 香の物 数の子 小のし

雑煮 青み へきかつほ

二三献

小角 栗こんふ 田作り

三献 吸物

ひれ添身 土器 皿

梅椀

木坪切込

御上添 寄焼物 三身宛

山いも 干瓢 干瓢 い 干 か の にしめ

皿鱠

汁 小蕪 つみ入

こ 月の火湯 \$54 BOD 翻色灯 级粉皆 10000 いとれるい

> 重さかな 三、ほふれん草ひたし二、香茸白あへ 一、うと青あへ

砚蓋 鮪色付 かつを付山いも 椎茸にしめ 板切かまほこ

花牛蒡

漬物箸

はるいか

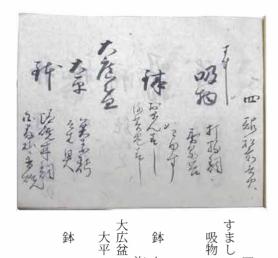
座敷の盃も 此通りしめて相済 白みそ 御酒 吸物 半へん 冷酒 盃相添渡 丸うと 火取魚 取肴

> 春きく 岩たけ

磂台



薄くす行 鉢丼 鉢 吸物 平茸 鮑酢貝 鱸生作り 青からし 茶せん 大才豆腐 うと砂糖かけ



鉢 おまんすし

海苔巻すし

吸物 打粉鯛

寿海苔

わゆす

四、鯛松前煮

大広盆 大平 魚素麺 そば■ 白■梅ケ香焼塩焼丼鯛

如

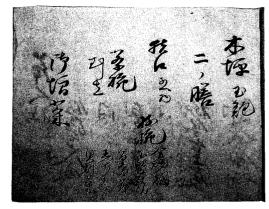
白みそ すゝかし菜 長鍋 鉢 同 醤油 大猪口 いり酒 ささね 磳煮

न्त्र निर्म

超光等 本腦 学和

大皿 鯛焼もの 本膳 代々酢 一口鱠

> 計 一 青 森 入 飯



御増菜がしもの

猪口 あへ物 二ノ膳

梅椀

貝割菜 しちよふ 自髪件 頻

総括

てくるような資料を選択することを心がけた。 り、資料の活用やアウトリーチについて、新たな可能性が感じられた。 クショップをやってみたいという提案を地元の方からいただいてお 機会を設けて欲しいという要望がおおかった。来年度は連携してワー 想とともに、伝来する美術資料、館蔵資料の多様さに驚く声、本物に が増えた事は、おおきな前進である。参加者からは、これまで知らな 料をベースにしながら、それぞれ全く違ったアプローチでおこなった。 直に触れることが出来たことを喜ぶ声が寄せられ、今後もこのような かった大社と江戸の暮らしや文化について知ることが出来たという感 ことを目標とし、三回のワークショップは、いずれも所蔵する文書資 化が育まれ享受されていたかを、より多角的に公開し体験してもらう クショップ等を通じて、江戸期の出雲地方においてどのような生活文 庁地域の核となる美術館・歴史博物館支援事業」の助成を受けたワー 展示については一年を通して、江戸時代の大社の生活や文化が見え 昨年までのワークショップと較べると、地元出雲以外からの参加者 今年度は、手錢家資料を活用した展示並びに「平成二十七年度文化

雲今昔 婚礼」でも、新たな資料や疑問点がいくつも出てきた。資料だけでは補いきれない事柄も出てくる。今年度の「茶陶展」、「出文化がより具体的に見えてくるが、調査研究を進めるほど一軒の家の料や伝承と、美術工芸品や生活用具が結びつくことで、当時の生活や手錢家には「家」の多様な資料がまとまって伝来している。文書資

術館等公開施設を併設して存続しているので、今後、情報の共有を行出雲地方には、複数の旧家が資料を散逸させることなく、一部は美

り連携を強めていきたい。 図書館が文書資料の保存調査で協力しているケースもおおいので、よのような旧家には、島根大学法学部山陰研究センターや島根大学附属い、資料の保存や調査について協力していく必要性を強く感じた。こ

企画展「出雲今昔 婚礼」では、「婚礼」というキーワードを設定をあら解読作業を継続したい。
「萬日記」のデジタルデータを活用できた。
昨年度は、
ながら解読作業を継続したい。
とにかく頭から解読を試みたものの、思うように進まず今年度は中断とにかく頭から解読を試みたものの、思うように進まず今年度は中断とたが、頭目記」のデジタルデータを活用できた。
昨年度は、
ながら解読作業を継続したい。

る機会が作れればと願っている。デジタル化を継続し、来年度以降、資料と研究成果について発表できいくつも見つかり、個別の調査研究は少しずつ深まっている。資料のまた、今年度も江戸時代の文芸活動について新たな文芸関係資料が

手錢家資料を活用した江戸時代の出雲文化の発掘と再生事業 -平成二十七年度出雲文化活用プロジェクト実施報告書-

出雲文化活用プロジェクト実行委員会

会長長 手錢 白三郎 公益財団法人 手錢記念館 理事長

副 杉江 実郎 国立大学法人島根大学 学術情報機構附属図書館長

理 副 会長 吹野 卓 国立大学法人島根大学 法文学部山陰研究センター長(法文学部教授)

事 要木 純一 国立大学法人島根大学 法文学部山陰研究センター研究員(法文学部教授)

田中則雄 国立大学法人島根大学 法文学部山陰研究センター研究員(法文学部教授)

事務局長 田中俊二 手錢 裕子 国立大学法人島根大学 学術情報機構附属図書館 図書情報課長 公益財団法人 手錢記念館 事務局長

佐々木 杏里 公益財団法人 手錢記念館 学芸員

事務局員

事務局員 昌子 喜信 国立大学法人島根大学 学術情報機構附属図書館情報サービス・グループリーダー

二〇一六年三 月三十一日発行

集:出雲文化活用プロジェクト

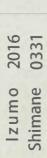
総括文責:佐々木杏里(手錢記念館学芸員) 編集補助:連 和加子(TEZEN)

デザイン:breath

行: 公益財団法人 手錢記念館

〒六九九一○七五一島根県出雲市大社町杵築西二四五○一一

Tel/Fax:〇八五三-五三-二〇〇〇



主催:出雲文化活用プロジェクト

公益財団法人 手錢記念館 / 島根大学附属図書館 / 島根大学法文学部山陰研究センター 助成:平成27年度 文化庁 地域の核となる美術館·歴史博物館支援事業